Osaka University Knowledge Archive

Title	ワヘイのうた・霊の語り : パプアニューギニアの一社会における音の民族誌
Author(s)	山田, 陽一
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/29160
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏名・(本籍)	山田陽一（やまだ よういち）
学位の種類	学術博士
学位記番号	第 8876 号
学位授与の日付	平成元年10月26日
学位授与の要件	文学研究科 芸術学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	**ワヘイのうた・霊の語り** **――パプアニューギニアの一社会における音の民族誌――**
論文審査委員	(主査) 教授 谷村 晃 (副査) 教授 山崎 正和　助教授 山口 修

論文内容の要旨

本論文は，パプアニューギニア・東セピック州，コロサメリ川中流域に居住する総人口約300人の定住性狩猟採集集団であるワヘイの人びとの発話，語り，泣き表現，歌唱，竹笛吹奏による音コミュニケーションの分析を通して，音がどのようにして社会的に意味ある表現を生み出しているかを考察する民族誌的研究である。

ワヘイにとって，音の体験は霊的存在とのコミュニケーションの体験として位置づけられている。人びとは，音の構造のなかに霊の語りを聴き，霊の認識は音の響きを通して現実化される。そして，音の知覚と霊の認識の背景にあって両者をつないでいるのが，「根の話」と呼ばれる膨大な神話の体系である。本論文は，この人と霊の相関関係の理解を通して，ワヘイの音表現の社会的意味の問題に迫ろうとするものである。

本論文は「はじめに」と「結論」のほか，5つの章から構成されている。さらに付録として親族呼称一覧，グハの神話およびサガイシの神話のワヘイ語テクストが収録されている。

まず，「はじめに」において，本論文の視点と方法，フィールドワークの背景に触れ，内容の概観が述べられ，さらにワヘイ語表記についての説明がある。

第一章「ワヘイ社会」では，ワヘイの居住地の地理的位置，生態環境，他の言語集団との関係，人びとの生活ぶり，クランを中心とした社会組織，婚姻規則などを概観したうえで，多彩な祖先神話の集積をもとに民族史を再構築し，集団形成の過程と社会変化の軌跡を振り返る。

第二章「死と憑依」では，人の死と死霊の憑依という社会的に突出した出来事をめぐって表出される音の諸相について考察される。そこで扱われるのは死によって誘発される泣き，泣きことば，泣き歌と

いう悲哀の音表現である。死者に向けて個人的に表出される泣きと泣きことばは，死者をめぐる社会関係を浮き彫りにし，集団で唱和される泣き歌は死と霊についての社会的イメージを演出する。そして，これらの泣き表現が序曲となって死霊の憑依が導かれるとする。

憑依の形態には，霊が人間に憑依して，その人間の口を借りて語りをおこなうものと，人間が手で支える長い竹筒に憑依した霊が，竹の打奏によって信号や応答を示すものとがある。いずれの場合も，独特の音のモードを通して「霊の語り」は現れ，人びとは音により霊と直接に交信する。それはワヘイの音コミュニケーションの極端な様態であると同時に，その本質的な姿を端的にしめすものである。本章では，このワヘイの音コミュニケーションを理解するための基盤を提供する重要な作業として，死の事例2件を録音・記録した資料をほとんど逐語的に翻訳し，それらが生起した脈絡にそって分析的に記述する。

第三章「霊と神話」においては，霊とのコミュニケーションという問題をより広い視野から捉えるために，ワヘイが霊的存在をいかに分類，知覚，認識しているかを考察する。霊は基本的に，死霊，邪術霊，超自然霊の三種に分類されており，ワヘイはそれぞれの多様な性質を，数多くの遭遇談や神話的エピソードによって説明する。その説明の体系的な記述を通して，人びとの生活が霊との関わりなしには成り立たないことや，生活空間がいかに濃密に霊に取り囲まれているかを具体的に示す。また，霊の現れはとくに聴覚によって鋭敏に感知され，風のうなるような音や低い吐息のような音として表現されることが多い。この知覚の仕方は，歌唱や竹笛の音にも適用されており，彼らの音知覚が霊の感知と根源的につながっていることを表している。さらに，霊に関する認識のあり方を詳細に分析して，それが神話的存在の認識と本質的に連続していることも明らかにする。

第四章「グハとうた」では，グハという超自然霊によって人間に与えられた，死の表象としての「うた」について考察する。グハは超自然霊のなかでもとりわけ力が強く，すべての霊を支配していると考えられている超越的存在である。うたが与えられた経緯は神話により説明されているので，まず，ワヘイ語による神話の全訳をうたの解釈のためのテクストとして提示し，そこから，男性の成人儀礼の創始者としてのグハの姿と，グハの概念がワヘイ文化を象徴する「揺らぎ」の様態の根源となっていることを引き出す。

続いて，うたが生起する脈絡を記述したうえで，人びとがポリフォニックに声を絡ませて作り上げるうたの構造が，グハの揺らぎを表現するために組織づけられていること，そして表出されるうたの意味の源泉が神話に求められていることを詳しく例証する。そして最後に，うたに関わる用語法や概念化，あるいはそこに反映された人びとの生態観察力や文化的論理の分析を通して，うたが構築されている原理を明らかにし，さらにそれを音事象全般の知覚と評価の仕方のなかに位置づけることによって，ワヘイの音の認知体系におけるうたの重要性を示そうとする。

第五章「サガイシと語り」で論述の焦点となるのは，うたに内包される「霊の語り」という側面である。これについて，やはり強力な超自然霊の一種であるサガイシという神話的存在によって与えられた竹笛吹奏を事例として考察する。竹笛から生じる音の構造は，サガイシという霊が竹笛に憑依して表出するうたであり，それは霊の語りとして明快に解釈され，社会的に重要な音のモードとして位置づけら

れている。人間はただ竹笛に息を吹き込むだけであり，音の実体を生み出すのは霊である。このあり方は，死霊が人や竹に憑依して発する声や音の受容や解釈の仕方とまさに連続したものと言える。

ここでもまず，サガイシのうたを根拠づけている神話テクストを提示したうえで，そこから霊の現れ方，夢見の状態，男性と女性の神話的対立，竹の象徴性というサガイシ特有のトピックを引き出し，霊，夢，男と女，そして竹の織りなす象徴的相互関係を論じる。竹笛の音は，こうした神話的背景に基づいて，霊の語りとして成立している。続いて，サガイシの語りが生起する脈絡や語りの構造を詳しく分析することによって，霊の語りが実際に音としていかに現れるかを示す。そして，神話と霊の認識が，語りの指し示す意味として把握される過程を明らかにしたうえで，うたの根底に横たわる語りの原理を析出しようとする。ここにおいて，歌唱も竹笛吹奏も，「霊の語り」の現れる「うた」として統合されるのである。

「結論」では，これまで考察してきたことを総括したうえで，「ワヘイにとってうたとは何か」という，うたの社会的意味の問題を論じる。ワヘイの環境と生活，神話，霊の憑依，感情のもつれ，霊認識といった諸相はこの地点で収束し，霊の語りとしてのワヘイのうたは，そうした社会の諸相を象徴する装置として姿を表すことになる。

本文，付録，引用文献　計　389ページ（1ページ：35字×25行)。400字詰原稿用紙換算　約850枚。
地図6点，図表9点，譜例21点，本文中に挿入。
「ワヘイのうた・霊の語り」参考録音テープ（90分×4本)。

論文の審査結果の要旨

本論文は，きわめて綿密なフィールドワークに基づいて，ワヘイ社会における音表現の社会的意味の問題に迫ろうとした民族誌的研究である。パプアニューギニアは，近代文明の影響をかろうじて免れた少数民族が，今なお生き残る数少ない地域として，民族音楽学研究の貴重な対象の一つとされている。パプアニューギニアの少数民族の民族音楽の研究は世界的にみても数えるほどしか見出されないが，本論文は，実地調査で得られた貴重な民族誌的資料を一定の見通しのもとに分析し，音コミュニケーションとその社会的意味の研究に新たな知見を拓いたものとして高く評価される。

評価すべき第1の点は，「結論」で述べられているうたの社会的意味についての筆者の見解である。われわれが住む文明社会とは余りにもかけ離れた定住性狩猟採集集団，ワヘイの音楽研究を通して，筆者は「ワヘイにとってうたとは何か」を問い続ける。ワヘイのうたがはらむ意味とは，結局のところ，神話のなかで展開される霊の行為，思考，策略，超越性，支配力などが，音と想像力を通して再現されたものであるとする。うたの存在論は生態の重要な構成物である樹木の隠喩を通して霊と神話の認識体系に結びつけられ，また，うたの構造は，霊の様態そのものである川の流れの隠喩を通して，生態との共生関係を浮き彫りにしているという。木と川の部分名称や，水の様態を表す種々の形容詞や動詞が，

うたを説明するための音楽的語彙として隠喩的に転用される。筆者は，こうした語の多義性に基づく隠喩によるメタ言語のコード化の体系を，フェルドにならって，「音楽理論」と呼ぶ。筆者は，民族意味論的な観点から音に関する概念の分析を進めていけばどの社会事例からも，こうした音楽理論を導き出すことは可能であろうという。

うたはまた，人びとの現実存在の比喩でもある。うたが隠喩的に指し示す霊と神話の認識は，彼らの現実認識の写しであり，モデルであると考えられるからである。彼らはその意味で，霊も神話も，あるいは自分たちの存在も生活も，あらゆるものが不確かで不安定なものであることを了解していると見るべきである。彼らはまた，霊を畏れる気持ちと幸福感とが紙一重の違いしかなく，いずれも不安定に揺れ動き，簡単に相互転換するものであることも承知しているはずである。そして，うたとは，そうした現実が声と音とによって描き出されるものなのである。人びとは，うたの体験を通して，結局は自らと社会の姿を確認する。それは，おぞましくもあれば幸福でもあり，忌まわしいものでもあれば楽しくもあるという，まさに揺れ動く不確かな姿である。この意味で，うたは，この世の中に確かなことなど何もないというワヘイの現実認識を体現しているのであると筆者は結論づける。

ここには，ワヘイという小集団の事例研究を深めることによって，そこで得られた民族誌的体験を普遍化し，「ワヘイにとってうたとは何か」の問いを「人間にとって音楽とは何か」という問いにまで尖鋭化しようとする筆者の基本的姿勢が伺われる。少なくとも筆者は本論文において，この根源的な問いに示唆的な答えを用意したといえるであろう。

評価すべき第２の点は，その作業の緻密さと視野の広さである。パプアニューギニアは言語学者にとっても興味の尽きない地域である。とくにグハの神話とサガイシの神話の録音，聞き取り，ワヘイ語による書き取り，およびその逐語的全訳は学術的に貴重な資料である。さらに女性や第三者には隠されているはずの泣き歌，竹に憑依した霊の語り，グハの神話とサガイシの神話の録音テープも貴重な民族資料である。比較的短期間の調査でこれだけ充実した資料が収集され，その内容が第三者の目からではなく，ワヘイの人びとの心の内面に即して把握されていることを高く評価することができる。そこには筆者のフィールドワーカーとしての視野の広さと，事態把握の確かな能力が感じられる。

評価すべき第３の点は，とりあげられた個々の事象についての叙述の巧みさである。筆者はつねにワヘイの人びと自身の言表を引用しながら，きわめて客観的に事象を記述しているが，各章の話題の配列，地図や図表によるデータの挿入の仕方，論文全体のまとめ方等に注意深い配慮を加えることによって，ワヘイの霊的世界に読者を引き入れる術を心得ている。筆者のこの表現の巧みさは，単なる文章構成力や叙述スタイルの問題なのではなく，実はその背後にある筆者のエコロジカルな思想ないしは哲学によるものと思われる。この意味でも筆者は単なるフィールドワーカーを越えた，深く思索する文化人類学者であるということができる。

評価すべき第４の点は，グハのうたとサガイシの語りの音コミュニケーションを具体例に即して，譜例を援用しながら分析したことである。これらの音コミュニケーションは，本来第三者には隠されるべきものであるので，採譜という客観的処理にそぐわないはずのものである。筆者もその点を考慮して，ワヘイの霊的世界の緊張と揺らぎの面に焦点をあてて，それが音楽構造的にどのように反映されている

かを明らかにするために，リズムと音形の面での声部間のポリフォニックな構造関係を抽出している。それは，上述のメタ言語のコード化された体系としての「音楽理論」の具体例と考えてよいであろう。この分析は民族音楽学的分析のモデルの一つとして役立てられるものと思う。

以上，本論文の卓越した諸点を列挙したが，その一方で本論文に若干の問題点も認められる。たとえば，考究の対象がワヘイの社会に絞られたために，周辺民族との文化的影響関係が鮮明にされないうらみがある。第一章の「ワヘイの社会」において，パプアニューギニア，さらには南太平洋世界におけるワヘイの意味について記述して欲しかった。また，主たるテーマであるワヘイの音コミュニケーションの分析において，霊的世界の緊張と揺らぎを反映するものとして声部間のポリフォニック構造を取り上げたことの利点は認められるが，その視覚的表現のために五線譜システムを利用したことについては，なお一考の余地があると思われる。さらに霊的世界の揺らぎの反映ということであれば，音色，音質の微妙な変化，テンポの揺らぎ等，メタ言語的に「音楽理論」化できる要素がなお多く残されているように思われる。しかしながら，これらの点は，いずれも今後，改めて論じられるべき問題であり，きわめて精度の高い本論文の価値を損なうものではない。

以上のように，本論文は従来の研究の水準を越える優れた論考であり，音楽学と民族学との境界領域を取り扱う研究者としての筆者の資質をよく示している。学術博士（課程）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。